

今回は 家庭科の授業改善報告 です。

## ◇ 研究授業

日 時：2021年10月25日（月）4限

対 象：2年4組（43名）

担 当：渡辺夕子

科 目：家庭基礎

単 元：支え合い共に生きる 3. 高齢者の理解と高齢社会・高齢福祉

学習目標：高齢者の疑似体験と衣服の着脱介助実習を通してコミュニケーションや支援の基本を学び、高齢者の尊厳を保つための自立支援の必要性を理解する。

学習活動：効率性・安全性、感染症対策に配慮し家庭にある衣服を持ち寄り着脱介助を行った。介助実習を通して、「自立支援」や「個人の尊厳を護ること」について考えた。

## ◇ 研究授業の成果と今後の課題

事前に、介助が必要になる身体の状態として「麻痺」「患側」「健側」「着脱介護の原則」などの専門知識と、座位姿勢での前あきの着脱を体験した。今回は、介助実習と「自立支援」や「個人の尊厳」に焦点化し授業展開をした。恥ずかしさから授業に気後れする生徒もいるので、今回は、「進学先・就職先の研修で福祉施設にボランティアに行くこと」を想定し実習に臨んだ。

### 【生徒の感想】

・人に着替えさせてもらうことは、気を遣うし申し訳ない気持ちになった。誰でも自分の身の回りのことは自分でしたいと思う。衣服の着脱だけでなく、トイレや食事、入浴も同様だ。今後、高齢者の方と接するときには、できないことで情けない思いを感じさせないよう言葉遣いや声の大きさ、相手の名前を呼ぶなど心がけていきたい。

・高齢者支援とは、すべてを助けるのではなくできないことだけを手助けすることであり、このことが自立支援につながると分かった。そのためには、相手としっかりコミュニケーションを図り、「できること」と「できないこと」を確認したい。相手を思いやり、人として大切にすることは、その人の尊厳を護ることにつながる。

・一緒に暮らしている祖父母は、今はとても元気で畑仕事や趣味を楽しんでいる。いつか誰かの手助けが必要になったときは、力になりたいと思った。明日を生きる力を引き出せるような手助けをしたい。

### 【発展的な学びへ】

FRH問題解決型探究活動と連携し実践活動を行った。本校は、令和2年度よりFRH（地域共創フラッグシップハイスクール）指定校として持続可能な社会の構築に向けて地域社会の課題に目を向け問題解決型探究活動に取り組んでいる。生徒は2年次で「家庭基礎」を学んでおり、今年度はFRH共通テーマを「SDGsとくらし・いのち・きずな」としグループ



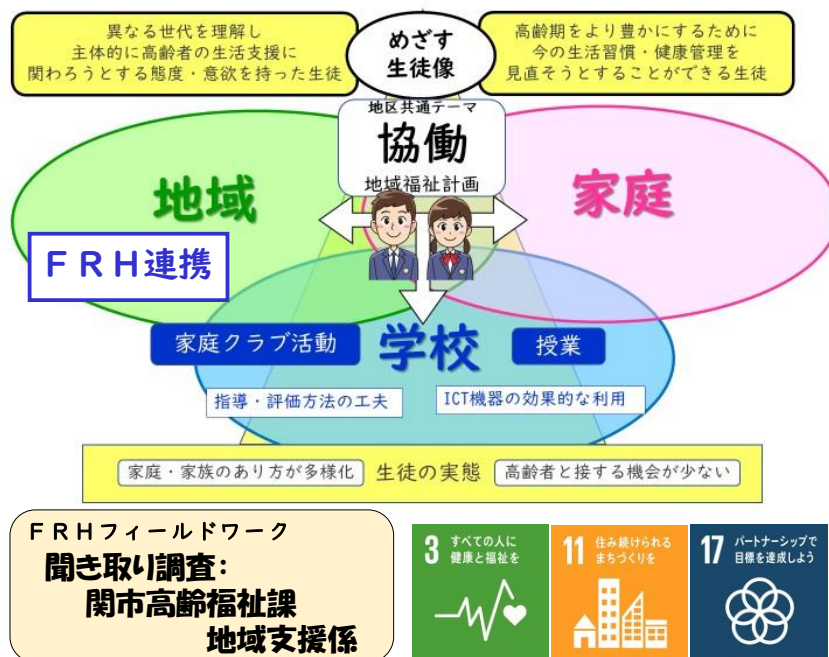
実習:着脱介助の様子

単位で設定したテーマの研究に取り組んだ。高齢者福祉をテーマに設定したグループがフィールドワークとして、「共生」、「福祉」の視点で高齢者の暮らしと行政の取り組みについて関市高齢福祉課に聞き取り調査に出かけた。

【生徒の活動報告】

「単身世帯への配食サービスや介護予防施策など具体的な支援と課題についてお話を伺い、誰もが暮らしやすい街づくりに向けて、何が求められているのかを学んだ。今後、私たちのグループでは、関市の各地域の活動を詳しく調べ、生活情報をチラシなどにまとめて配布するなど、情報弱者になりがちな高齢者の暮らしをサポートしたいと考えている。」

12月に行った校内発表会では「見守りシール」を活用した認知症の方への対応方法を寸劇にまとめ、課題解決に向けた提案をした。



## 関 高 校



関高校生徒と高齢福祉課担当者

令和3年度家庭・福祉部会中濃地区研究発表 関高校実践報告 より

【今後の課題】

家族形態と高齢者に対する印象などの事前アンケートによると、家族形態は様々で核家族世帯67%、祖父母との同居16%、敷地内別居17%であり、祖父母と同居している生徒や、祖父母が身近に暮らしている生徒は全体の1/3程度といえる。核家族世帯で生活している生徒は、感染症対策の影響もあり祖父母と交流機会は年に1回程度と少ないことから、高齢者の暮らしや抱えている課題について具体的にイメージしづらいようである。一方で高齢者やその家族が抱える生活課題を自分事として捉えられる生徒もおり、生徒の置かれている生活実態も多様である。高齢者と接する機会が少ない生徒には、車いす使用や買い物のなど日常的に起こりうる生活場面で自立支援の考え方をどう活用すればよいか考えさせていきたい。

今後も、日本の高齢社会の様々な現状や課題について理解するとともに、高齢者に対する正しい認識を持たせ、家庭や地域社会の高齢者と積極的に関わっていく能力や態度を養いたい。また、社会全体で「豊かな高齢期」を支える必要性に気付かせ、社会の一員としての自覚を持ち共生することができる態度を育てていきたい。